
魔法戦記リリカルなのはForce外伝～フッケンバイン一家と裏に生きる者達～

織田上総介信長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはForce外伝「フッケンバイン一家と裏に生きる者達」

【Nコード】

N7812X

【作者名】

織田上総介信長

【あらすじ】

如何な世に善と悪を比べりや

残念ながら悪が勝つ

つもる恨みは尽きぬとも晴らしてやらなきや気がすまねえ

これは、管理局に実験材料として扱われ今でも生き残る者を主体にした描いた話です。

まあ、ただのオリキャラなんすけどね

序章 ミッドチルダと裏稼業（前書き）

何だかんだと上げてみましたこの作品。

まだまだ、レベルが低いかもしれませんがどうか暖かい目ですろしく
お願い致します。

序章ミッドチルダと裏稼業

世の中の善と悪を比べれば

どの時代でも悪が勝つ。

このミッドチルダも何の例外もあつたもんじゃねえ。

汚ねえところに足を一回でも突っ込んじまえば皆、悪と変わらねえんだからよ

世間がまだJS事件とかいうもんが解決したばかりで管理局内がドタバタ騒がしい中

とある世界で税の横流しをしていた局員やら他の文明が遅れてる世界の若い女を性的に売買する局員と絡んでいた企業絡みの人間が何者かに暗殺されているというケースが増えてるらしく

その上、中には”仕事人”という”裏稼業”に頼めば金次第で晴らせせぬ恨みを晴らしてくれるというのが話題として密かに盛り上がっている。

また、この”仕事人”金次第という形で貧困層で悩んでる人がどんなに少なからうが必ず為し遂げているというのもあるが

依頼の大半は、十中八九どれも殺しの依頼しか無かったりする。

また、管理局もこの噂を知らないふりして全く捜査をしてない訳でも無いのだが

未だどの事件も凶器という凶器が見つかってなかったり何らかの強い魔法で殺った痕跡が無いのもあり

今では、何処の誰もわからない事から内部の者による何らかの目的だのはたまた反管理局絡みの組織が殺ってるんじゃないかと噂もあつたりするが

真相は、未だに不明だったりする。

「今回見つかった死体の身元なんですが、調べたところ車の免許を確認したんですが……ミッドの住民で独身女性なんですけど病で

伏せてる弟さんの入院費用を貯める為にちよつくら危ない橋でも渡つたか解りませんが……風俗勤務で働いてたらしいですよ。で、歳はハラオウン執務官と近いんでしょ。免許証の生年月日を見りやまだ二十前半とまだ若い女ですぜ」

「……………ご苦労様です。引き続き引続き何か分かったらまだ見習い執務官みたいな者ですけどあちらで死体の調査をしているティアナ・ランスター執務官が私にお願いします。カミイズミさん」

「へい、了解しました。にしても、私なんかよりちゃんとした捜査官をつけりゃいいんじゃないかねえかと私としちゃ思うんですが……………」

「本来なら貴方の仰る通りなのですが、最近では、裏の世界と絡む事件が多発しております。それに、管理局内で裏の世界と絡む人材の一人で貴方の名前が挙げられたのです。モンド・カミイズミ陸曹」

「まったく、それも何かの噂じゃないんすか？それに、私なんかが裏の世界とそんなに絡むような危ない橋は渡りませんよ。それこそ、ちゃんとした捜査官にでも潜らせりゃいいじゃないっすか」

金髪で長い髪にモデルのような体型が目立つフェイト・T・ハラオウン執務官という若手のエリート執務官に不揃いだと呟く男モンド・カミイズミ陸曹は、成人男性の平均的な身長にしてはやや低く最近じゃ170cmも及ばないと三十路寸前な年齢でやや体力が衰えているんじゃないかと気にしていながらも細い目付きでやる気も見

えない雰囲気がをもしながらもボサボサとした髪をかきながら目の前に見える死体を眺めながら

死体の付近でやや顔を青くしながらも真面目に捜査しているストリートなオレンジ色の髪が目立つティアナ・ランスター執務官をやや不安そうに見つめていた。

因みに、カミイズミ陸曹は魔導師でなく一般局員で殺人現場の死体を扱う他に街中の警備くらいが主な仕事らしいが、同僚だった者からは、暇そうに街中をぶらつきながら昼を過ごしているというらしい。

だが、夜になると警備だと言いながら夜中の2時過ぎまで行っものが主らしいが

遅い時は、明朝の5時くらいになってから戻る事もあるらしく過去に後を追っても見失ってしまいいかなか足取りが掴めなかったから何かあるんじゃないかという噂もあるが

フェイトが彼を捜査に加えた主な理由として挙げられるのは、裏社会について捜査していた捜査官が、裏の世界の人間とやり取りしている姿を目撃してしまったという衝撃な事実であり

証拠の写真を彼に見せたのだが、彼は細い目付きなままその写真を

眺めながらも自分にはあまり関わり無いと言わんばかり何事も無いよう答える。

「まあ、裏社会なんざ足を突っ込もうとしたい奴なんざあまりいませんからね。私の場合、そういう上官に頼まれて使者みたいな形で行ってただけで、あまり関係を持ったりなんかしちやいませんよ」

「ですが、貴方が行つた夜勤での見回り時間はあまりにも長過ぎます。それに、写真で写つてるとこは、裏社会でもそれなりに危険なところらしく私達でも迂闊には踏み込めないのですよ」

「へえ、そりや知らなかつたですな。まあ、とか言つても私は自分の世話をしてくれる上官に頼まれた通りの場でちよつくら会う機会は御座いましたが……。つたく、魔力もねえ私なんかそんな危険なところへ送り込むなんざ何を考へてるんすかね……。」

「本当、何故貴方をそこに送つたのか私も気になつたので、貴方の上官から直接聞かせて頂きました。どうやら管理局に勤める前まで、貴方が裏社会の人間として生きてたという事実は地上本部でも公には出来ません。とはいえ、裏の世界と絡んでいる事件があれば、どうしても貴方みたいな人材が不可欠だというのもあり地上本部は、私達に貴方の素性を明かさなかつたのでしよう」

「ほう、たかが落ちぶれもんな奴一人にそこまで目をつけてお調べになつたとは……。大したもんですよ。とはいつても、貴方に裏の

素性なんざ話す気はありません。裏を知るつつのは、それなりの覚悟があるか分からねえ若い姉ちゃんに語る話じゃありませんからな。では、私はこれにて帰らせて貰いますよ。何分、最近じゃ夜勤続きでろくに休んじやいねえもんでしてね……………」

カミイズミは、凝ってる肩を揉むような動作をしながらフェイト達
の場から去って行く。

その後、ティアナが調べた結果から死体となつて見つかった彼女が裏の世界に携わつてると思われる管理局内でもブラックリストに挙げられていた”企業”の名前が記されている名刺が見つかった事から彼女達と裏の世界を渡り歩く”仕事人”との勝負が始まるきっかけとなるうとは、誰一人気づく事は無かった。

第一話"・募る仕事仲間"・(前書き)

ストックさせておいたものを投稿させて頂きます。

因みに、後4話もありましたが追々させて頂きますのでその時はよろしくお願い致します。

第一話 " 募る仕事仲間 " ;

カミイズミサイド

つたく、今回の依頼主がどんなもんか覗こうかと思っただがその前に、JS事件などで活躍したフェイト・T・ハラウン執務官とティアナ・ランスター執務官っていう若い姉ちゃんに目をつけられるなんざついてねえな。

まあ、今回だけは奴等から尻尾を巻いて逃げ切れたとは思いながらも俺は、裏で昔世話をしたセキサイ・ヤギウっていう堅物で無口な事で知られる管理局局員と話を付けて5年も前にミッドの空を騒がせた違法科学者ジェル・スカリエツィっていうちよっくら変わりもんだが

あの事件で世間を騒がしたくらいなだけもあつて切れ者な野郎と最近、不足気味になった裏稼業の人員でも渡して貰えないか再度、話を聞きに来た。

「で、今回お前さんにわざわざ話をつけて来た理由は何なのか分かってんだろっな？」

「ああ、あの堅物な奴から君達の”仕事”について聞かせて貰ったが私が管理局相手にゆりかごを起動させるより前から行ってたとはね……………依頼人の賃金を受けとれば誰であろうと殺してしまうなんて、なかなか面白そうな話じゃないか」

「……………あの無口な野郎がそこまで語るなんざ珍しいな。まあ、こつちも3年も前まで仕切ってた元締めがあのに世に逝つちまつたり、他の連中も行方知れずな形でこつちもまた人手を集めなきゃならなくなつたんだ。それに、協力してくれるんならちよつくらここでドンパチを起こすところを見せてやる。とはいっても、連中にモルモット材料にされちまつたもんをテメエに披露するだけなんだけどな」

「フフ、EC細胞とやらで君の細胞が適合してしまつたんだつたね。君の力が見れるなら私としても興味深いところだ。良いだろう。一応、話をつけたところ私よりも興味深く賛同してくれる者がそろそろ分かる」

俺が、自分の戦闘服でもある黒い着物へと身に纏い盤若のお面を被りながら愛用してる”ムラマサ”と名付けた妖気なる紫色を漂わせる日本刀を構えると発見して見つける魔導師達がバリアジャケットに装着して杖を装備する連中が数人いたが

俺は、鞘に納めている刀を抜き取り奴等の動きを見計らいながらも動揺する一人の背後をとって背部を思いっきり刺し込みながらも屍と化した野郎の姿にビビる奴の前面に思いっきり斬り込み慌てふた

めく三人目に胴を決めるかのように胴体を真つ二つに斬り捨てると

後方にいる4〜5人くらいいる連中が杖を構えながらビビりながらも接近する姿に俺は、思わず氷りついた表情のまま奴等が放つ砲撃魔法の軌道を刀一つで反らせつつ中央にいた奴に刀を深く突き刺しながらも左右近くから迫ってくる連中が杖で砲撃を放とうとしたところを右サイドから瞬時に野郎の背後を深々と刺し込みながら斬り捨てて微笑む色っぽい姿をした女性が現れる。

「やっぱり、貴方の殺し方って容赦ないわよね〜」

「……………あなたに言われたくねえな。カレン・フツケンバイン。で、ようやくJ.S事件の主犯者から何人か”仕事人”が決まるそうだ」

「へえ〜良かったじゃない。これで私達のところにもプラスになれば尚更ね。で、これ終わったらたまには私と帰らない?」

「ああ……………お前さんの一家か。悪かねえが俺もどうやら報告した通りのフェイト・T・ハラウン執務官つつう面倒な奴に足を掴まれそうなんだね。もう少し管理局員を演じながらあそこのんびりする事にするわ」

「やっぱり面倒な事態になったのね。やっぱり、そつちにはアルを派遣させとくから危なくなったら戻ってきて頂戴。貴方は私達の中

でも殺しに情がないし迷いも無い上に私と似た何かを感じるからこれからも一緒にいてくれると助かるのよ。後、そいつらの事だけど殺したと色々と面倒になるからもしもの場合になったら深手を負わせる程度なら許可するわ。って言っても貴方の”デイバイダームラマサ”って刀が血を吸う度に斬れ味上がる危険度が高い品物だからそういう点じゃ難しかったわね……………まあ、面倒な事態にならない事を祈るわ」

「まあ、お前さんが派手に暴れなきゃ面倒な事態も回避出来そうなんだが……………はあくお前さんが来ようが来まいがどっちにしろ俺の表の仕事が増えた事には変わらねえか……………」

俺は、話し込みながら二人で斬り捨てた無惨な屍を眺めつつビビりながら連絡しようとしていた責任者らしき野郎をぶっ刺すとまだ杖を構えて抵抗する魔導師達を眺めていたが

この混乱に乗じて脱出したスカリエツティという奴から話だけしかトーレとかいう鋭い目付きで、野郎の首筋を締め付けるスタイルのいい女が腹黒そうな金髪美女と一緒に現れた姿を目撃する。

「なかなか速い動きじゃねえか。まあ、即戦力とか考えちゃいなかったが……………この”仕事”に慣れてくれりゃどうにか使いもんになるか……………で、そのメガネは”情報屋”紛いな仕事に慣れた奴が残したミッドの裏の事情について残ってる情報がまんまある筈だからよ。こっから出たらそっちで住み込んで働いて貰うぞ」

「へえ〜ドクターから聞いたけどなかなか面白そうな”仕事”なのねえ〜後、私はメガネじゃなくクアットロよ。おじさん」

「……………トーレだ。先程から貴様等の戦いを見せて貰ったがなかなか興味深いな。で、あそこにいる女は誰だ？」

「ああ……………お前さん達もたまに会うと思うがあれは、この”稼業”の”二代目元締め”といったところだな。俺がこの”稼業”を再び始めたのも管理局っていう偽善団体と殺り合うのもあるが、あの人が面白いからっていう理由で手を結んでるだけだしな」

「まあ、付け加えるんだったら私達は一つのファミリーみたいなもので、この人が私達の行動に管理局が目をつけてられないくらい派手に暴れてるだけなんだけどね。本当、便利で助かってるよ」

気付いた時には、カレンがニコニコと手を振りながら用意した脱出用のルートを一家の連中に手筈していて

俺達は、何事もなかったかのようにミッドチルダの裏社会エリアへと戻り

二人に今後の打ち合わせ場である人気も^{ヒトケ}ない埃まみれで古ぼけた喫茶店やら新たに雇った二人の住む場で元は、昔組んで今は居なくな

った情報屋だった奴が使つてた家を案内し終わるとクタクタに疲れ
きつた身体を休ませる前に夕飯でも済まそうかと冷蔵庫の中を見る
と空っぽになつており

隣で昨日買ったばかりの食材が消え果てており

代わりに隣で人の衣服をひっぱりながらご飯粒が幾つかついてると
んぶりを片手に持った少女みたいな奴がニツコリと笑っている。

「なあ？まだ、食い足りねえんだけどこれからどっか美味しい店と
かに行かねえか？」

「ハハツ……………だから、俺はお前さんが来んのを望んじやいなかった
たんだよなあ……………ツたく、1ヶ月分の白い米に農業エリアに隠れ
てる連中からちよつくら安くお裾分けして貰った牛肉やら野菜が一
気に消えてんぞ」

「ああ〜だから思ったよか美味しかったのか……………また、貰つてこ
りゃ良いじゃん」

「……………馬鹿野郎。”仕事仲間”だった奴等がその旨い野菜や肉を
安く仕入れたんだ。それに、前の仕事人仲間の大体は金に頼り奴等
しか生き残つちやいなえ分こついうもんを仕入れるのに最初しか安
く売つてくんねえんだよ。ツたく、しゃあねえ……………明日から”表

の仕事”でもやって貰うしか無さそうだな……………」

「……………ちょっと待て。何かめんどい展開になってないか？」

「ああ、お陰様で面倒な展開になったな」

その後、俺はこいつと一緒に行きつけの蕎麦屋で夕飯を済ませたが

隣で足りねえ足りねえと騒ぐ大食い娘が何杯も食っせいで俺の財布の中身がなり軽くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7812x/>

魔法戦記リリカルなのはForce外伝～フッケンバイン一家と裏に生きる者達～

2011年10月21日02時05分発行